OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	帰化する理論:看護学の輸入理論・方法論事例から学術発展のメカニズムを考える
Author(s)	諏訪, 敏幸
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/85314
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　諏訪　敏幸　）	
論文題名	帰化する理論: 看護学の輸入理論・方法論事例から学術発展のメカニズムを考える

論文内容の要旨

（関心と目標）

本研究の主な関心は学術発展のメカニズムにある。本研究では特に他分野で生まれた問題関心・理論・方法論（以下特に区別の必要がない限りこれらを一括して単に理論と呼ぶ）の輸入過程に焦点を当ててこの問題を考える。一般的に、理論はその分野の研究伝統（この用語はラウダンとは異なる意味で使用している）の下で生まれ、研究伝統との関係で受容され、研究伝統の一部となるという経過をたどる。輸入理論に焦点を当てることで、生成時の研究伝統との関係をいったん埒外に置くことができ、輸入理論と輸入先の研究伝統との関係に問題を単純化できる。

学術の発展についての研究は多様に展開されている。だが発展メカニズムという問題意識から見るとそれぞれ過不足がある。研究史・学史・科学史は、トピックスは克明に追うものの理論化への視点に欠ける。自己組織化論・ネットワーク構造論などの構造的アプローチは、その限りでの説明性には優れるが社会的要素の考慮に欠け現実的事象に関する説得力に乏しい。科学社会論や制度的アプローチは学術の知的側面に根差す発展メカニズムを外部変数化する傾向があり、科学知識の社会学はこれを従属変数化する。科学計量学・計量書誌学的アプローチは知的側面に迫ろうとするものの一局面の研究に終始しがちである。古典とされるT. クーンのパラダイム-通常科学論、D. J. デ・ソラ・プライスやD. クレインの科学共同体論、E. ロジャーズの普及理論もこれらの例に漏れない。頭書の問題関心を追究するためには、社会の中にある知識という視点が重要である。科学哲学は学術的知の論理を―その発展も含めて―深く説明するが、知をその理念型において孤立的に捉えようとして現実の社会的な知のあり方から離れている。社会の中の学術知識を捉えるには、「真実である信念」という哲学において伝統的な知識の定義からいったん距離を置いて仕切りなおす必要がある。本研究では第1章および補論1-1でこれらについて整理した。そして本研究なりの問題意識を次の3つのリサーチクエスチョンにまとめ、これに答え得る仮説の形成を目標に掲げた。

RQ1: 他領域からの理論輸入はどのようなプロセスを経るか

RQ2: それはその領域のどのような仕組みによるか

RQ3: それは当の理論と両領域の研究伝統とにどのような副次的作用をもたらすか

（方法）

研究の全体的な方法論はアブダクションであり、仮説形成を目標とする。そのための主な方法として事例分析を行った。素材は、主に看護学分野における他領域からの輸入事例に求めた。看護学は多数の研究を擁する社会科学系の大分野だが、学術的には1950年代に起源を持つ新興分野でもある。また現場とのつながりの強い「社会に直面した」分野で、多様な問題を現場から汲み上げつつ活発に変化し続けている。このような特徴から、事例素材としての看護学には以下のような方法的利点が期待される:

- 学術領域としての発祥から今日までの全過程が見渡し得る
- 新たな理論の輸入も活発に行われ、その定着に至るリアルな動態が把握しやすい
- 物理学などハードサイエンスや技術系分野などを軸に研究されてきた学術研究の弱点を補い得る

観察と分析の方法は、主に引用分析・経年頻度分析・著者分析・ネットワーク分析などの科学計量学的手法、学史、理論分析などである。これらを局面ごとに組み合わせて多面的な観察・分析を目指した。量的/ネットワーク的分析のデータは書誌データベースから採取した文献情報・引用情報を主に使用した。

（各章の内容と結果）

第2章では、本研究の要となる「領域」、「研究伝統」、「輸入」などの概念を検討し、領域のあり方、領域と理論の関係について整理しつつ、事例データに基づいてその実際を観察した。まず領域に関しては、デ・ソラ・プライスやクレインによって学術発展の基礎とみなされてきた「科学共同体」、つまり人間集団としての領域が、実は共同研究などによる強い流動性を有すること、また従来「科学」の典型とみなされてきた理論物理学のような古典的領域が

今日ではむしろ例外的存在であることを示した。次いで音楽学・日本文学・コンピュータ工学・心理学に材を採り、幾つかの「小さな領域」を観察した。また、日本の看護学における「レジリエンス」理論の輸入を観察し、他の幾つかの主題・理論の動きとも対比した。ここでは、それらの研究の拡大がその問題の特性により異なるパターンを示すこと、そこには単なるコミュニケーション的拡散ではない、特有の社会的メカニズムがあることが示唆された。最後に発達心理学を素材とした観察を交えて、領域への理論流入の多様性について検討した。

第3章と第4章ではグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の看護学への輸入を取り上げた。GTAはブルーマーのシンボリック相互作用論を継承し、シカゴ社会学の伝統の中で生まれた方法論である。まず第3章で、GTAがどのように看護学に輸入されて帰化に至ったのか、すなわち輸入の過程について分析した。ここには幾つかの特徴を指摘することができる。すなわち、1）グレイザーとストラウスによる『*The discovery of grounded theory*』で1967年に提唱されてから急速な普及を開始する（離陸）まで約20年を要していること、2）輸入領域である看護学での普及が、その本来の領域（自生領域）である社会学に先んじ、規模的にも上回っていること、3）看護学領域内での全研究論文に対する相対頻度を見ると離陸後の急激な上昇からある時点で停滞ないし漸減に転じていること、などである。たしかにロジャーズの普及理論が言うように、輸入は幾つかの段階を経て進行する。だがそれらの段階区分は、普及理論が考えるように外部からの普及努力に対して受容者側の温度差のようなものが浸透速度の差となって現れるといったものではない。そこには研究伝統の規範作用や「小さな集団」の形成などが絡み合った構造的なメカニズムが存在する。本研究は事例を通じてこのことを明らかにし、それを踏まえて理論輸入の段階区分をモデル化した。

第4章では、輸入の過程でGTAがどのような内容的変化を受けたかを調べた。2方向の顕著な変化が見られた。1つは、実際の経験的研究においてGTAを使用する際に、それをどのようなものとして受容するか、つまりGTAの使用場面での変化である。特に目立ったのは、断片的な分析手法として限定的にGTAを受容する傾向（道具化・方法化）である。またこれと並行して、フィールド研究におけるデータ収集のトライアンギュレーション、絶えざる比較、中範囲理論への理論化などについても変質や縮退が認められた。これは看護学と並ぶ大輸入分野である教育学や経営学でも同様である。これらは「正しい」GTAからの逸脱というより、むしろ分野事情への適応、すなわち普及理論でいうところの「再発明」に当たる現象だと考えられる。看護学ではこれに伴って、本来のGTAと再発明された運用との間の二重規範とも言うべき現象が観察された。もう1つの変化は、このような研究現場での変化、そして学術環境の変化に対応した、GTA理論自体の理論的変化と拡散である。第4章後半では、ストラウス、コービン、シャーマズ、木下らの議論を追い、また周辺のGTA代替理論の動きも検討した。

第5章では輸入過程から帰化後における理論の内容的変化、特に理論的な分岐について、3つの事例で観察した。1つ目の事例はレジリエンス理論である。第2章では日本への輸入を見たが、ここではアメリカおよび国際的な場面での看護学への輸入を見た。レジリエンスの事例では、もともと児童・青少年を出発点とするレジリエンスの理論が、その後「社会に直面する」諸分野、特に看護学の多様な問題関心に出会ってさまざまな対象者―家族、高齢者、マイノリティ、患者、医療者など―に関わる理論へと分岐し発展していくようすを観察した。2つ目はメタエスノグラフィー(ME)/メタシンセージス(MS)の事例である。GTAやレジリエンスでは理論センターはあくまでも看護学外にあったが、ME/MSは看護学外で発祥後ほどなくしてその理論センターが看護学に移り、方法的完成と理論的分岐へと進んだ事例である。3事例目は認知心理学における「宣言的知識・手続的知識」を取り上げた。この理論は認知科学での交流を通じて脳科学から認知心理学へと輸入された。しかしもともとこれを「知識」の理論とすることには無理があり、脳科学での提唱者たちは比較的早期にこの理論から撤退した。しかし認知心理学ではほぼ輸入時のままの形で理論を保持し、今日に至っている。すなわち輸入を通じて元々の分野と輸入分野との間で理論的分岐が生じた事例である。

（結論）

第6章では以上を仮設的にまとめた上で、総括的な議論を行った。輸入に関する仮説の要点は次の通りである。

- 輸入は研究伝統との関係で一連の段階を経て進行し、最終的には研究伝統に組み込まれて領域に定着する（帰化）
- 輸入過程は研究伝統の規範性とも絡み合いながら領域内に「小さな領域」を形成して進行する知的・社会的過程であり普及理論などが想定するコミュニケーション過程とは異質のメカニズムが中心となる
- 輸入過程で理論・方法論は、それ自体、再発明・理論的変容・分岐・二重規範の形成などの変化を受けることがあり、一部はその出自の分野にもフィードバックされることがある

本研究は領域を流動性の下で捉え、「社会に直面する」分野に焦点を当てた点で従来研究と異なるが、これは今日の学術の動向に合致したものだと考える。本研究ではもっぱら輸入局面での動態を見たが、その知見は領域内で形成された理論（自生理論）にも拡張できる可能性がある。限られた事例からの仮説形成であるため、必ずしも多様な問題を広くカバーできているわけではないが、未開拓だったこの分野が今後前進するための一歩となり得ると考える。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　諏訪　敏幸　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授 副査　教授 副査　准教授	山中　浩司 川端　亮 辻　大介

論文審査の結果の要旨

諏訪敏幸氏の博士学位申請論文『帰化する理論：看護学の輸入理論・方法論事例から学術発展のメカニズムを考える』は、現代の学術における研究領域がどのように生成し発展するのかという問題を、特に看護学におけるいくつかの研究領域の発展を事例として検討し、学術全般に関わる発展のメカニズムについて従来の科学社会学にない視点を提供する野心的な試みである。論文タイトルにもあるとおり、この研究は従来の科学社会学の主流をなす、自生的に発展し、高度に自律的で閉鎖的な物理学のような領域とは全く異なる領域を問題としており、このことが逆に、社会や他領域の研究から常に大きな影響を受け変容しつづける現代社会の多くの学術分野の発展を理解する上で重要な視点を提供するものとなっている。

論文の構成は1章と2章が理論、方法と概念的整理作業、3-5章が事例研究、6章が全体の考察と結論であり、最後に50ページにわたる補論が追加されており、全体で300ページを超えるきわめて精緻な分析の労作である。

まず、第1章において申請者は、本研究の問題の所在を、特定の研究伝統のもとで発展する理論という、学術の発展過程の一般理解とは異なる形での発展のあり方（ここでは輸入理論による発展）が、どのようなものであるのかという点に設定し、このことによって学術知が社会の中でどのように発展、変容するのかという問題に接続することを表明している。ここでは、クーン、プライス、クレインなど科学社会学における主要な研究の潮流のみならず、ロジャースの普及理論なども含めて知識の伝播と変容に関わる様々な議論を参照しながら「理論輸入」という現象を探求する価値について検討している。第2章においては、本研究で使用される「領域」「研究伝統」「輸入」といった概念について整理が行われ、現代の学術においては、クーンが対象とした理論物理学のような自律的な研究領域と閉鎖された科学者集団によって構成される「科学共同体」は例外的な存在であり、むしろさまざまな小さな領域における輸入、共同研究などによって流動化した状態が一般的であることが、細胞組織工学から社会学にいたる12分野の研究者と科学共同体の関係の計量分析から指摘され、この点でそうした領域における学術の発展過程のメカニズムを分析することが必要であると示唆される。第3章では、社会学に由来するグラウンディド・セオリー・アプローチ（GTA）が看護分野にどのように輸入され、この分野の質的調査の主流をなす方法としてどのように定着したのかが、科学計量学的手法を駆使しながら時代を追って記述され、この事例をもとに、理論輸入の段階区分モデルを提唱している。第4章では、GTAの内実が看護分野への輸入によってどのような変容を遂げたのかを、この理論が導入されている社会学、看護学、教育学、経営学の分野でGTAを使用している文献の計量分析から、方法化、道具化などいくつかの概念にまとめている。また、この現象を理論の変質ないし逸脱ではなく「再発明」（利用者による改変）とみなしている点が興味深い。第5章では、看護学分野に輸入された後に理論がどのように分岐・発展していったのかを、レジリエンス理論、メタエスノグラフィー／メタシンセージス、宣言的知識・手続的知識論の三つの事例において検討し、理論が分野をまたいで移動することでどのように分岐し発展するのかを記述している。第6章では、これらの事例研究の結果を踏まえ、理論輸入という現象について複数の仮説を提唱している。これらは「帰化」「領域形成」「再発明」「理論的変容・分岐」「二重規範形成」などの概念で表明され、いずれも科学社会学において今後重要な検討課題となるものと考えられる。

本研究は、科学社会学において考慮されることが少なかった「理論輸入」という現象の精緻な事例分析を通じて、異なる研究分野のみならず、学術以外の社会領域ともさかんな交流によって流動化する現代社会の学術のあり方に重要な知見を提供するものであり、博士（人間科学）の学位にふさわしい業績であると判断する。